

ずっと 住み続けたいまちに

特集 志木市役所



埼玉県南西部に位置し、東京・池袋まで急行で20分という好アクセスの埼玉県志木市。面積は9.05平方キロメートル、全国で6番目に小さな市に約76,000人が住む。市の中心には新河岸川と柳瀬川、そして東には荒川が流れ、「ずっと住み続けたいまち」志木市の景観を構成している。そんな志木市の新たなランドマークとして2022年7月に新庁舎が開庁した。



鹿島建物管理概要

管理開始：2022年7月
管理内容：設備管理・清掃・警備・
電話交換業務
管 轄：関東支社

建築概要

施設名称：志木市役所
所在地：埼玉県志木市
中宗岡1-1-1
主要用途：官公庁舎

設計：佐藤総合計画
施工：鹿島建設
面積：敷地面積 9,039㎡
延床面積 12,621㎡
建築面積 4,235㎡

階数：地下1階、地上4階
構造：鉄骨鉄筋コンクリート造、
一部鉄骨造



自然環境と共生するまち

©株川澄・小林研二写真事務所



4階にある議場は段差のない空間で、親子傍聴席も用意



©株川澄・小林研二写真事務所

主要な窓口が集約配置された1階には市民ホールやキッズコーナーもある



川と共に生きる

志木市の発展は市内を流れる川と共にある。江戸時代の1638(寛永15)年に川越で大火があり、川越復興のために江戸と川越の物資運搬に活用されたのが、現在の新河岸川(しんがしがわ)だ。その後、川越城主の松平信綱が新河岸川の改修工事を行い、江戸と川越を結ぶ舟運ルートを整備した。これに伴い沿岸にはいくつもの河岸(舟から人や荷物をあげる船着場)がつけられた。その中でも、現在の志木市役所付近に置かれた引又河岸は、近郊の農作物などがこの市場に集積され、物資交流の拠点となった。奥州街道と交差する交通の要衝ということもあり、周辺には宿場や定期市が開かれ、経済文化の中心地として、幕末から明治初期にかけて大いに繁栄した。

大正時代になると、東上鉄道(現在の東武東上線)が開通し、志木駅が開業した。当初は別ルートが検討されていたが、地元有志が地域の発展を願い、鉄道誘致のために奔走した結果、現在の志木を通るルートとなった。その後、昭和後期には志木ニュータウンが造成され、新たな賑いが生まれた。

新河岸川は1931(昭和6)年頃に、約300年続いた物資輸送路としての役割を終えたが、現在でも新河岸川や柳瀬川のほとりにはたくさんの人が訪れ、市民のオアシスとして親しまれている。

市民にやさしい新庁舎

志木市は1970(昭和45)年に市制を施行し、その2年後にはかつて河岸で栄えたエリアに(旧)志木市庁舎を建設した。近年、庁舎の老朽化に伴い、市民や議員、職員、専門家を交えて市役所の在り方が議論され、庁舎の建て替えが決定した。川に挟まれた立地のため、水害や震災時の地盤について心配する声もあり、移転も検討された。しかし、調査の結果、しっかりと対策を施せば防災拠点としての機能も十分に確保できることが確認されたため、市の中心地であり市民のまちづくりの拠点として期待できる従来の敷地での建て替えが決まった。約2年半かけて旧庁舎の解体、新庁舎の建設を進め、2022年7月19日に開庁した。

志木ニュータウンをはじめ、団塊世代とその子供世代が多く住む志木市は、若者や子育て世代にとって住んでみたいと思えるようなまちづくりをめざしている。新庁舎はユニバーサルデザインを徹底した明快なフロア構成とし、戸籍や子育て、福祉など、生活に密接に関わり、利用頻度が高く関係性の深い窓口は1階に集約。市民が利用しやすい庁舎となっている。

賑いを創出する 憩いの場

環境と共生する庁舎づくり

市役所を囲う2本の川と緑地、この場所ならではの自然を活かした庁舎づくりにも注力し、環境負荷の低減や省エネ対策も行っている。中間期には2つの川から涼風を取り込み、吹き抜けを通じて屋上の換気窓へと抜ける風の流れをつくることで、機械を使わずに室内の温度調整と換気ができる仕組みを採用。また、各フロアの南側テラスに設けられた深い庇には、夏の強い日差しを遮り、冬は温かな光を室内に取り込むことができるという特徴もある。

一方で川に囲まれた立地は水害の心配とも隣り合わせだが、1階は過去の最大浸水より5m高い位置とし、主要な設備を4階以上に配置。また、大地震に備え免震構造を採用するなど、防災面でも市民が安心して利用できる庁舎をめざした。

志気を高める市民のステージ

庁舎前面の大きな広場はグランドテラスと称し、市民が集まり、活動や交流ができるスペースとなっている。ランチタイムにはキッチンカーが出店し、イベント時にはステージパフォーマンスや展示即売会も行われる、かつての市場のような賑いと交流が生まれる場所だ。新庁舎と一体的に再整備を行った、いろは親水公園とも連携し、「さくらフェスタ」(3月)や「市民祭り」(12月)なども開催している。

グランドテラスに面した庁舎1階には約100㎡の市民ホールを設け、研修や講演会、イベントに活用されている。また、4階南側の展望ロビーは、明るく眺めの良い開放的な空間で、市民の憩いの場となっている。

人々が集い、市民に親しまれている新庁舎は、2023年度に埼玉県内の市庁舎で初めてグッドデザイン賞を受賞。名実ともに志木市の顔としての役割を果たしている。



©株川澄・小林研二写真事務所

©株川澄・小林研二写真事務所

1階の市民ホールは間仕切りで区切ることも可能

これまで以上の賑い創出を目的として、いろは親水公園もリニューアル。水遊びができる遊具を新設した

©株川澄・小林研二写真事務所

©株川澄・小林研二写真事務所

開庁時のイベントには多くの市民が訪れた

The BM Partner

志木市役所

鹿島建物総合管理
関東支社 建物管理部
志木市役所管理事務所
所長 望月 春樹

鹿島建物総合管理
関東支社 建物管理部
リーダー 上野 可津見



100年
をまもる対談

市民生活を支える パートナーとして

鹿島建物では、2022年の庁舎リニューアルから志木市役所の総合管理業務を受託している。志木市役所の総合管理を立ち上げ、現在は支社から現場を支える上野リーダーと、2024年7月から管理事務所運営を引き継いだ望月新所長に、公共施設ならではの思いや今後の展望を聞いた。

上野 当社は志木市役所の行政管理課様と連携して、設備管理業務のほか、警備、清掃、電話交換業務の取りまとめなど、様々な業務にあたっています。市民から見れば私たちも市の職員の一員です。庁舎内では市民の方から直接問い合わせを受けることもあります。志木市の顔として、常に丁寧な対応が大切です。

望月 その姿勢は特に意識しています。警備員や清掃員、電話交換手など、委託業務に関わる全てのスタッフにも、徹底してもらうようにしています。

上野 新庁舎の開庁直後はゼロからのスタートでわからないことも多く、スタッフ間の連携がうまくいかず市民や職員の方々にご迷惑をお掛けすることもありましたが、スタッフの仕事のなかで気づいたこと

と改善策を随時挙げ、行政管理課様も意見を積極的に取り上げてくださるなかで、業務が円滑に進むようになりました。特に、電話交換業務については、我々にもノウハウがないなかで、交換手の方々の自助努力によって改善された部分が大きく、本当に感謝しています。その後も、毎週1回、行政管理課様と設備、警備、清掃、電話交換の担当者が集まって定例ミーティングを実施し、情報交換や改善提案を行っています。

地域に根差し、生活に密着した施設管理

望月 志木市からはノウハウの蓄積と設備のライフサイクルコスト低減の検討が求められています。来年度は省エネ提案を行う予定で、運用しながらデータの収集を行っています。省エネしつつも市民に快適に過ごしてもらうため、空調は特に気を使っています。センサーの数字だけに頼らず、こまめな巡回で体感温度を確認し、来庁者や職員の方々の様子を観察して室温の変化を判断し、いかに効率よく快適な空間を保つかを常に考えています。



上野 水光熱費等の原資は市民の税金という意識を常にもち、省エネを徹底しながらも、様々な世代の方が過ごしやすくて快適な環境を維持する必要があります。また、利便性の観点から、来庁者に不都合なくご利用いただける建物かどうか、巡回等で気付いたことがあれば、行政管理課様に情報提供や提案を行ってきました。

望月 最近ではゲリラ豪雨も頻繁に発生するので、雨の動向には常に注意しています。新河岸川と柳瀬川の合流点に隣接しているため、大雨の時は浸水被害と隣り合わせの立地です。梅雨や台風のシーズンは特に雨水槽や川の様子に注意しています。

上野 これに関しては旧庁舎の頃から志木市の職員の方が熟知している部分もあるため、行政管理課様と連携を密にして、緊急時に備えています。ここは一人現場のため、慌てて無理をしないように、予測して準備することが大切です。



中央監視室で空調など施設内の数値を細かく確認する。志木市役所では主要な機械室や電気室は4階以上に配置。非常用発電機(左)も4階に設置し、浸水などの災害に備えている。



望月 市役所は市民の安全を守る拠点です。庁舎に関わる全ての人にとって安心して快適な建物環境を提供できるよう、業務の改善を図っていきたくと考えています。

上野 市民の方から「室温がちょうどいいですね」「いつもきれいですね」などの声をいただくこともあります。皆さんが集まって談笑されている様子を見ていると嬉しくなります。今後も憩いの場づくりのサポートをしていきます。

